

特集●貴司山治と〈占領・開拓〉の時代

「小林多喜二全集」の編纂過程〔戦前編〕

貴司山治資料などからの検討

伊藤 純

一 戦前の小林多喜二著作発刊概要

小林多喜二の小説、評論などの著作は、戦前、厳しい禁圧の下にありながらも、多くのものが刊行されている。

生前刊行された主なものをあげると――

一九二九年 『蟹工船』一九二八年三月十五日』

戦旗社（定本日本プロレタリア作家叢書2）

〃 『蟹工船・改訂版』戦旗社

一九三〇年 『不在地主』

日本評論社（日本プロレタリア傑作選集12）

〃 『蟹工船・改訂版』

戦旗社（日本プロレタリア作家叢書2）

〃 『一九二八年三月十五日』

戦旗社（日本プロレタリア作家叢書9）

〃 『工場細胞』

戦旗社（日本プロレタリア作家叢書10）

一九三一年 『東俱知安行』改造社（新鋭文学叢書26）

〃 「壁にはられた写真」改造社『ナツプ傑作集』

〃 「戦ひ」新潮社（作家同盟農民文学研究会『土地

を農民へ』

〃 『蟹工船』改造社

〃 『オルグ』戦旗社

一九三二年 『沼尻村』作家同盟出版部（日本プロレタリア

作家同盟叢書2）

などである。

さらに一九三三年二月、官憲によって拷問虐殺されるという衝撃的契機の直後には、全集を含む十点近い著作が集中的に刊行された。この集中的刊行について、貴司山治は戦後、『新日本文学会版小林多喜二全集第三卷月報』¹⁾（以下「全集の歴史」と略称）で――

ナルプ（日本プロレタリア作家同盟・伊藤注、以下同）中央常

任委員会では「小林多喜二全集」の刊行を決議して、四月（一九三三年）には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一次配本（第二巻）を出した。

一方、コップ（日本プロレタリア文化聯盟、作家同盟の上部団体）でも小林労農葬記念事業として、かれが命をかけてたたかった時期の論文をあつめた「日和見主義に対する闘争」一巻を出版した。：五月には、私共の企画により組織外において改造社から「不在地主・オルグ」「地区の人々」「蟹工船、工場細胞」、国際書院から「転形期の人々」、九月には遺稿の部分をつくめた「転形期の人々」を改造社からそれぞれ刊行した。これらの総刊行部数は十数万に上った。

以上の活動は、小林の虐殺に封ずる当時のプロレタリア文学運動からの逆襲として、計画され、実行されたものである。

と証言している。

なお、一九三三年内の小林多喜二著作の刊行物を国会図書館で検索すると――

『不在地主、オルグ』改造文庫

『日和見主義に対する闘争』プロレタリア文化聯盟出版部

『転形期の人々』国際書院

『転形期の人々』改造社

『地区の人々』改造社

『地区の人々・改訂版』改造社

『小林多喜二全集 第二巻』国際書院

『蟹工船、不在地主』新潮文庫

『蟹工船、工場細胞・改訂版』改造文庫

の存在が確認され、貴司の証言が事実であることが確かめられる。

しかし、この「逆襲」的ラッシュがすぎると、刊行は目に見えて少なくなる。一九三五～六年に入って刊行されたナウカ社版『小林多喜二全集』全三巻と、『小林多喜二書簡集』、『小林多喜二日記』くらいである。日中戦争の始まった一九三七年（昭和十二年）には、三笠書房の叢書の一冊に採録されているが、さらに、この年の六月、『小林多喜二随筆集』という一本が、発禁本や関西の労働運動資料の蒐集家である長尾桃郎の編として書物展望社から刊行されている。その経緯については最近の『日本近代文学館年誌』に島村輝氏がコメントされている。⁽²⁾

このように、戦前を通観すると、小林多喜二の作品について「全集」と銘打った刊行物は――

一九三三年『小林多喜二全集 第二巻』（「蟹工船」と「不在地主」を収載）日本プロレタリア作家同盟編、国際書院

（右記を『作家同盟版全集』と略称）

一九三五年『小林多喜二全集 一～三巻』ナウカ社

一九三五年『小林多喜二書簡集』ナウカ社

一九三六年『小林多喜二日記』ナウカ社

(右記三種を併せて『ナウカ社版全集』と略称)

の二種類である。

筆者は先に別稿「小林多喜二全集の編纂過程——『貴司山治日記』にみるその表裏」^③で、戦後最初の小林多喜二全集編纂事業である一九四七年から一九五三年のいわゆる『新日本文学会版小林多喜二全集』の編纂過程について検討した。幸いこの時期に関しては貴司山治日記^④に比較的具体的な記述があるために、その様相をある程度明らかにすることができた。しかし、戦前の全集編纂事業については、非法法時代ということもあって貴司日記にもほとんど記載はなく、さらには、弾圧のみならず作家同盟をめぐる複雑な組織事情などもからんで、その実態は極めて不明確である。

幸い、最近、関西大学名誉教授浦西和彦先生から『新日本文学会版全集第三卷月報』をご恵贈いただき、長年求めていた貴司の『小林多喜二全集』の歴史^⑤の全文を確認することができた。それほど長い文章ではないが、それでも、戦前の小林多喜二全集編纂過程の骨格的な流れを確かめることができた。これに、片々たる関連資料や諸版の版面などの考証を加えることによって、ある程度状況を推定することができる。

もちろん、まだまだ資料や諸家の言及の見落としは少なくないと思うが、とりあえず現時点で考え得たことを以下にまとめ

たいと思う。

二 虐殺への抗議を籠めた『作家同盟版全集』

小林多喜二が虐殺された直後に刊行された『作家同盟版全集第二巻』は、今では稀覯本であり、国立国会図書館にはその扉に「禁安1—498」という発禁本である旨の標記がある、内務省納本と思われる一冊が所蔵されている。

奥付によれば発行日は昭和八年四月五日で、翌六日に発禁処分になっている^⑥。

貴司はこの出版について前記のように「ナルプ中央常任委員会では「小林多喜二全集」の刊行を決議して、四月には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一回配本(第二巻)を出した。」と述べており、これが、作家同盟による多喜二虐殺への「逆襲」の一つであり、周辺資料などから考えると、「逆襲」の闘いの「核」と位置づけられていたのではないかと考えられる。

作家同盟は、三月一五日の労農葬にあわせて機関紙『文学新聞』の「多喜二追悼号」を出している。その第四面最下段に作家同盟出版部の名で『小林多喜二全集 全六巻』発刊の大きな広告が掲出されている。そして実際に四月五日には第二巻が発刊されているのである。

この本が刊行されたのは、虐殺の日からわずか一か月半後のことである。

この時期には、通夜、告別式、三月一五日の労農葬など、警察と対峙しながらの危険なイベントが続き、さらに、作家同盟は前記のように、改造社などの外部出版社と協働して多種類の多喜二作品の編纂刊行を進め、あるいは『文学新聞』『プロレタリア文学』（作家同盟の機関紙誌）の特刊号も発刊するなど、資金難と発禁で正規の三月号が発刊できなかったというシビアナ状況を克服し、ただごとでない仕事量をこなしている。そこには、なみなみならぬ『逆襲』の情念の沸騰を感じるのである。

これは多喜二虐殺時点よりも数年前、作家同盟がもともと活発に活動していた時期の情景だが、虐殺後も変わるまい。いや、もっと暗く緊張した状況だっただろう。編集部は東京西郊、おそらく、まだ武蔵野の面影の残る畑や森の合間の粗末な隠れ家

あった。寒さに耐へられなくて、汚い、戦場のやうになつた部屋の中で、古新聞や反古を燃やして手を焙つてゐる……⁽⁶⁾

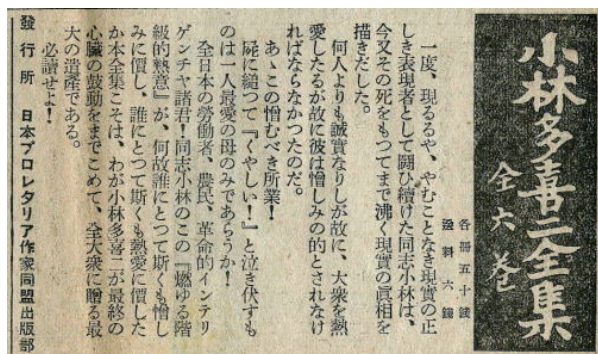


図1『文学新聞・多喜二追悼号』（1933/3/15）の第一面と「小林多喜二全集発刊広告」

貴司はこの時期に、多喜二虐殺から暗喩に富んだ小説「子」を書いているが、その中で半非合法状態の『文学新聞』編集部作業の情景を描いている。

まるで機関車の火夫か何ぞのやうに働いてゐた。ねるひまも何もなかった。秋から冬へ、その団体の非公然編輯部で、数人の仲間と朝から夜中まで、夜中から朝までといふ風に、石炭をもやしつゞけてゐた。

……夜のあける前にはよく温度が氷点下何度と言つて下ることが

の “離れ” か物置かであつただろう。周囲の畑や泥道には夜明けともなると霜柱がびっしりとたつ。そのようなところで、人々は “逆襲” の情念を燃やし続けたに違いない。

三 『作家同盟版全集』第二巻の内容

貴司の「全集の歴史」には『作家同盟版全集』は多喜二虐殺直後に作家同盟中央常任委員会で決定して発刊したと書かれている。ただ、編纂の実態は不明で、本として残されている「第二巻」にも解題とか編集後記、編纂者の連名などは全くない。

そこで、とりあえずこの第二巻にも採録され、かつ一九二九年以来、いろいろな版が刊行されている「蟹工船」を“指標”として、『作家同盟版全集』のありようを検討してみたい。「蟹工船」は小林多喜二の作品の中でもベストセラーであり、繰り返し刊行され、原稿も相当程度保存され公開されている。

『作家同盟版全集』刊行までのそれらの資料や刊本を列举すると――

・原稿（一部分）初出誌のための活字指定などが書き込まれた清書稿^⑦

・初出『戦旗』一九二九年五／六月号

・刊本――

①『蟹工船・一九二八年三月十五日』戦旗社、一九二九年九月（定本日本プロレタリア作家叢書②）

②『蟹工船・改訂版』戦旗社、一九二九年一月

（①から「一九二八年三月十五日」を除いたもの）

③『蟹工船・改訂版』戦旗社、一九三〇年三月（日本プロレタリア作家叢書②）

（広告などから普及版という位置づけらしく、定価も若干安い）

④『蟹工船・太陽のない街・鉄の話』改造社、一九三一年五月

⑤『作家同盟版全集 第二巻』作家同盟出版部編、国際書院、一九三三年四月

――などが挙げられる。

この中で、版面が特に注目されるのは③の一九三〇年三月戦旗社刊のもので、ほぼ総ルビとなっているのである。原稿や初出誌、および①にも若干のルビはあるがごく少ない。ところが③は平易な漢字にもすべてルビがふつてある。普及版という位置づけらしく、他の「作家叢書」が七〇銭―一円の価格設定なのに対して、五〇銭と安い。より広く新たな読者層を獲得しようとしたものであろう。

そして、『作家同盟版全集』（以下⑤と略記）もまた、ルビが多い。

③と⑤の発刊の間には三年の隔たりがあるが、編纂、版行の上で何か関連があるのでは無いかと考えたくなる。ところが、この、ともにルビの多い③と⑤を子細に較べると、どうも⑤はルビの多い先行版③を利用しないし参照したとは思えない相違が見

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデッキの手すりに寄りかゝつて、鰯牛が背のびをしたやうに延びて、海を抱え込んでゐる船館の街を見てゐた。――漁夫は指元まで吸ひつゝした煙草を囁と一緒に捨けた。巻煙草はおどけたやうに色々にひつくりかへつて、高い船舷をすれぬに落ちて行つた。彼は「煙草一杆消費かつた。」

赤い太鼓腹を幅広く浮かばしてゐる汽船や、
積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてど

もるやうに、思ひ切り片断を傾いてゐるのを、黄色い、太く鋭突、大きな鈴のやうなヅイ、南京
 皿のやうに船と船の間をせしは結つてゐるランヂ、寒々とぶらわいてゐるの、油煙やべ、屏や腐た、果
 物の浮いてゐる何か特別な體物やうな……波風の上で煙が波すれくになびいて、ムツとする
 石炭のむきを通つた。ウインのガラ〜といふ音が、時が波を仰ぐで直接響いてきた。

船 工 蟹

この盤工船博光丸のすぐ手前に、ベンキの削けた帆船が、へさきの牛の鼻穴のやうなところから、鉛の鎖を下してゐた。甲板を、ドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度か機械人形の



図 2 一九三〇年戦旗社刊の

『蟹工船・改訂版』表紙と冒頭普及版とされ総ルビ、定価も五〇銭と安く設定されている。(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより引用)

出される。

例えば、「蟹工船」冒頭の有名な一行――

「おい、地獄さ行ぐんだで！」

は原稿にも初出誌にも③にも「行ぐんだで！」という東北訛りに近似した特徴的な函館訛りがルビで指定されている。ところが、⑤にはルビがない。

あるいはそのすぐあとの――

「高い船腹すれぐに落ちていった。」

の「船腹」はこれも原稿も初出誌も③も「船腹」^{サイド}と特殊な船

乗り言葉を指示している。ところが⑤では何もない。

この二例だけでも、「エグ」とか「サイド」という読みを期待する作者の意を通じるためにはルビは必須である。ところが⑤は、ルビが比較的多い割には肝心の、ルビ必須と思われるところにそれが欠落しているなど、全体的にルビのつけかたも恣意的で、編纂は杜撰の感を免れず、何を底本としたかも明らかでない。

四 作家同盟の複雑な組織事情

ひるがえって、発刊主体の作家同盟の状態を検討してみよう。当時の作家同盟は、組織的に複雑な状況に陥っていたと、一九六五年、貴司は岩波の雑誌『文学』誌上での尾崎秀樹との対談で述べている。⁽⁸⁾

八年（一九三三年）の一月末に、佐多稲子がきて小林多喜二が会いたいといっている、というのですね。それで、指定された場所、渋谷宮益坂の途中にある古本屋の前で会ったわけだ。まず彼は、どうだったかね、と聞くんだ。ところが、小林は前年にはぼくを平同盟員に叩き落とす先頭に立ったわけ（9）です。それで、どうだったかねというのは、ふざけていやがるところで、君の「独房」という小説のおりだよ、といったら、赤い顔してるんだな。あの「独房」

というのは非難されたでしょう。それのとおりだということとは、一種のひどい皮肉だからね。

……そのあとで私に対して、作家同盟の中央委員会に帰ってくれ、というんです。

……帰って何をするんだ、といったら、林房雄と闘ってこれというのだ。林房雄はそのとき、すでに作家同盟をやめちゃっているのだな。だからそれじゃピンとが外れているということにならないかといったら、実はといって、作家同盟内のフラクション（共産黨員）は、鹿地（亘）、山田（清三郎）、川口（浩）、女では宮本（百合子）、佐多（稲子）、それから坂井徳三もそうだったけれども、その鹿地、山田、川口、三人がブロックを作っちゃって、自分との連絡を切って、コップの指導、党の指導に従わない、というのが。……というような状況を説明して、作家同盟の、いまだいえば修正主義的な傾向と闘ってくれ、というような意味合いの話なんです。……そんなことを話して別れたんですが、そしたらすぐ後でつかまって殺されちゃったんです。（傍線は伊藤）

このような多喜二の「林房雄にたいする闘争」、つまりは「日和見主義に対する闘争」に対して、貴司は前記「貴司・尾崎対談」の中で――

「多喜二の書いた」林房雄を対象としての、日和見主義に対して闘えという文章ですね。「多喜二が」それをどうか（「どう思うか」というから、……そうすればするほど、林は遠くへ行っちゃうし、林に続いているんな人が離散していくという結果に対して、君はなんにも考えないでやっているのは、困ったことだとか、そういう意見をいったんですね。そうしたら彼は、卑怯だからみんな逃げるんだという意味のことしかいわないですね。

小林の方針というのは、やればやるほど作家同盟がつぶれる方向でしかないのですね。それは小林だけではなく、宮本の方針でもあったわけです。鹿地亘が同盟内の党员的のキャップをしていて、小林と宮本の（「こういう」意見にたえず対立したということ、それは鹿地が書いていますね。

と述べている。

つまりこの時期、作家同盟は共産党ないし上部機関たる文化聯盟がコントロールできない造反状態に陥っていたのだ。この事態は、考えてみると、戦旗社事件^①以来の、鹿地亘という人物の一貫した姿勢が反映しているとも考えられる。鹿地の、大衆団体の独自性を擁護し党官僚支配に抵抗する頑固な姿勢が感じられる。

五 小林全集発行事業の文化聯盟・党中央への移行

このような組織状況の中で、全集発行事業の体制に変化が起こってくる。続刊が出ないまま、広告だけが「跳梁」する。

作家同盟機関誌である『プロレタリア文学』一九三三年五月号には半頁の発刊予告広告が出ている。ただこの広告では、発刊母体が作家同盟ではなくその上部団体である「プロレタリア文化聯盟」にかわっている。そして、全集の巻数が三月の作家同盟広告では六巻だったのが七巻に増えている。

さらに一一月発行の『プロレタリア文学』二巻六号——それは奇しくもこの雑誌の最終号であるが——には見開きの巨大な広告が登場する。巻数はいいに一〇巻全集へと肥大し、「九月第一回配本で来年九月に完結！」と、過ぎ去った過去の第一回配本期日をうたっているのである。もちろん、発行主体は「文化聯盟」である。

『作家同盟版全集』発刊事業が上部団体に移行していったことを、貴司は「貴司・尾崎対談」の中では簡単に——

そもそも多喜二全集は作家同盟で出すという話だった。そうしたら、宮本百合子なんか小林多喜二は、作家同盟だけの人間ではないから文化連盟のほうで出すべきだ、といいだしたわけだ。それがしばらくしたら、文化連盟で出



図3 『プロレタリア文学』二巻六号（1933/11/15 発行）の『小林多喜二全集』見開き広告

すのも身のほど知らずだといって、党中央部で出す、という話になった。

とだけ述べている。これはこれで、当時の左翼組織や組織人の「組織エゴ」や「大衆団体蔑視」が透けて見えるが、実際は

それ以上に、「造反者」鹿地こときにこの重要な仕事をやらせておけるか、という組織上の問題も大きかったのではないだろうか。

六 一九三三年中の編纂事業の実態と挫折

『作家同盟版全集』の一冊は「無かったこと」になり、全集発刊の仕事が上部機関であるプロレタリア文化聯盟（実質的には共産党中央）に取り上げられた結果、発刊事業はどう展開したのだろうか。

新たな所管者となったプロレタリア文化聯盟の機関誌『プロレタリア文化』には「大衆の手による『小林多喜二全集刊行』を提唱す」という「大号令」が掲載されている^①。

この「大号令」は二段組み八頁に及ぶ長大な「檄文」で

日本資本主義の危機の状態は、それを切り抜けるための満蒙侵略戦争開始後と雖も依然として進行し、寧ろ戦争によつて一層破滅的状态となったが故に、今や支配階級は人民の思想、文化の自由さへも奪ひとらねばその侵略戦争を「今日以降もはや一步も進ませ得ない」（荒木陸相の演説）までの危機に陥った。

日本においてもプロレタリアートは全人民の解放の事業

を遂行する唯一の階級として今日現実の歴史の上に登場したのだ。過去に於いて最も知的に洗練されてゐるインテリゲンチヤがこの歴史的使命を自覚し、身を以てプロレタリアートの側へ移り来り、果敢な闘争の先頭に立つことは資本主義第三期の一つの特徴ある現象である……

と、まず「革命は必然でかつ間近だ」というコミンテルン三二年テーゼに準拠した第三期論が展開される。そして――

小林全集を成功的に実現せしめることは、たゞ革命的プロレタリアートの闘争の一翼として闘われてのみその本来の革命的階級的意義を貫徹することが出来る。

今日まで……日本プロレタリア作家同盟においては、小林全集刊行の事業を革命的プロレタリアートの立場から、下からの統一戦線の樹立のための闘争の形態として提唱し遂行することについて小ブルジョア的見解がこれを妨げた。この見解の主要特徴は今日コップに全集刊行のための何らの経済的條件がないところから、直ちに全集の刊行をブルジョア出版業者に委託し終えれば足ると考えたところにあった。……同志小林の虐殺の下手人××「天皇」制テロルに対する大衆闘争の上に展開し、遂行せしめるといふ革命的政治的観点――ここから出発することによつてのみ実

際到大衆的方法によって刊行し得るといふ認識——を欠いたところから来ている。

と断じ、六項目にわたる詳細な「組織プラン」まで提示している。

では、この壮大な提案は実行されたのか。事業体を、「作家同盟」という「大衆団体」から「文化聯盟」という共産党直下の上部組織に格上げすることによって、より優れた制作スタッフが組織され、仕事が展開されるかと思うと、どうもそうはならなかったのである。

「貴司・尾崎対談」にその後の顛末が語られている。――

小林が死んでひと月ぐらい経った春のころに、佐多稲子が来て、宮本が会いたいといっているが会わないか、というから、いいだろう、ということ、場所はぼくのほうで指定して、何時間も話したな。宮本は当時は、とにかく最高幹部の一人でしたな。そのとき、いろいろな問題をぼくに持ってきたわけですよ。……〔その中の一つが文化聯盟・党中央が刊行主体となった『小林全集』の件で〕宮本は党中央部で出すと決めているから、その仕事をぼくにやってくれ、というのだな。そこで党中央部で出さなければならぬ必要はどこにあるんだとぼくは聞いたわけだ。党中央部で出せるわけのものでもないし、出すべきでもないし、

もつと広範な大衆的な小林多喜二全集刊行会を作って、そこで出すようにすべきだ、と主張したわけです。けっきょく彼もそれに賛成して、ぼくが刊行会を作った。発起人には、山本実彦はなってくれたが、嶋中雄作は断ってきまして。しかし水ノ江滝子は賛成してきたし、いろんな人がたくさん入ってきた。……三百円ぐらいの金が集まったかな……

——ということで、共産党であれ文化聯盟であれ、結局非合法組織では扱いようもなく、非党員でシンパの貴司に話しかけてきたのである。そこで貴司は刊行会を立ち上げ仕事を進めようとした。しかし、一九三三年中、全集刊行に漕ぎ着けることはできなかった。同時代の貴司日記（一九三四年三月二六日）には、この挫折の理由が直截に書かれている。

「コップ・文化聯盟は」内部的に、人的に、組織はもはや腐朽してしまつたのだ。私がコップの主観的要素（弾圧などの外部要因に対して組織側の状況）の崩壊ということに逸早く気づいたのは小林全集刊行会の仕事を通じて、全コップのどの同盟のいかなる機関もはやその機能を停止しているといふことを知った（一九三三年の）八九月ごろだった。

戦後の「全集の歴史」の表現では――

刊行会が党中央（宮本）に直結した合法活動だと気づいている者は幸いに一人もなかったが、この仕事やらそのほかの、当時の党活動への協力やらで、たえず宮本と連絡して仕事を進めて行く内に、協力者としての池田寿夫がやられ、杉本良吉がやられ、ついに宮本顕治もまた検挙されて「一九三三年一月」、私は合法面にとりのこされてしまい、どうすることもできなくなった。その内に私も亦検挙されてしまった（一九三四年一月）。……

となっている。前金三百円が預かり放しという状態で、事業は一旦潰えたのである。

七 一九三五／三六年の『ナウカ社版全集』発刊

貴司は一九三四年一月から約三か月間、杉並警察署留置場に拘禁される。二度目の長期拘禁であり、この間に、「良心的作家として合法面で書いていける範囲に後退する」という転向戦略を公表し、三月二六日に釈放される。

そして、それ以降の一九三四年後半、三五年、三六年という二年半は、むしろそれ以前のプロレタリア文学全盛期よりも、よりまとまっていたいくつかの仕事を果たしたように見える。その一つが『小林多喜二全集』（ナウカ社版）の編纂刊行だったのだ

ある。

この全集発刊については貴司日記一九三五年（昭和一〇年）一月一五日の項に――

小林多喜二全集をナウカ社から出すことに旧臘に話ができ
まりその編輯についてこの間、中野重治を同道、同社へ
行つて社主の大竹氏と相談し、小説のみを三巻に別けて出
すこと、一冊六百五十頁位とし、四六判一円五十銭、初版
千部、印税一割、刊行会へ申し込んできている分を二百人
とみ、その人たちには一人につき第一冊を一円二十銭に割
引く……⁽¹³⁾

と具体的な記載があり、また、編集実務を佐野順一郎⁽¹⁴⁾に行わせると書かれており、貴司のプロデュースでいわゆる『ナウカ社版全集』の発刊が実行されたことが確認できる。刊行会申込者を割り引く、というのは前章でふれた刊行会前金払い込み者に義理を果たすという意味だと思われる。

この『ナウカ社版全集』という仕事をなぜ行つたか、どのように行われたかは「全集の歴史」にその骨子が書かれている。

一九三五年に、私は幸い又自由をとりもどしたので、一
存でやはりこの「党委託」の仕事をつづけることにきめ、
ナウカ社を発行所として、小林多喜二全集を小説だけ三冊、

論文はどうしても出せそうにないのでのこし、代りに書翰集、日記各一冊を編さんして、合計五冊を刊行した。この発行部数合計二万である。

この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごしの仕事となった。このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などには相談にあずかってくれる人もなく、多くの旧ナルプの

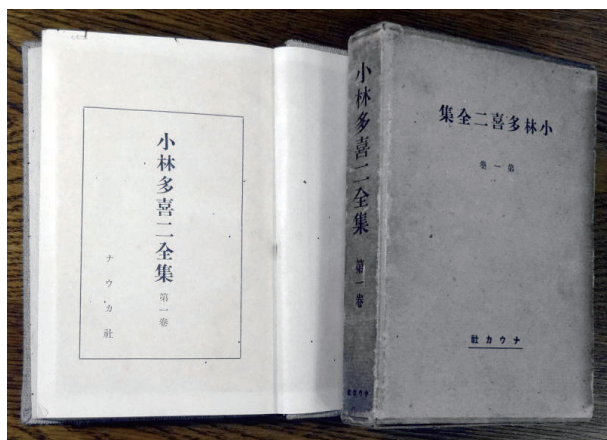


図4 一九三五年ナウカ社刊の『小林多喜二全集』（個人蔵）
「表紙扉と外箱」「扉写真」「奥付」

は、斎藤次郎その他の小林の旧友が、はたらいてくれたのだが、その時は名を秘していて十数年後になってわかった。そして、ふりかえてみると小林全集刊行の過去のたたかいは、これに参加してはたらいた多くの人々の内、私をはじめ、党員でない者が中心となり、党員はそれに助力する格好で推進されたのが特徴である。

文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であった。おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができて、ずいぶん楽しかった。もっとも、この仕事は「党遺託」の仕事であるのを知っていた中野重治、宮本喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた。（傍点伊藤）

そういうことを知らないまま、私の助手として松原宏遠、丸山義二、鹽田民夫（鹽田はナウカ社員として）がはたらいてくれた。書翰集のためには故村山篝^{かす}子が長いあいだむくいなき協力をつづけてくれたのがいまでも忘れがたい。書翰と未刊行原稿のためには小林三吾がはたらいた。三吾のかげに

そして、戦後、何の心配も無く多喜二の文章に接することが
できる時代になって発刊される『新日本文学会版全集』を祝う
この一文の最後を、貴司はこう結んでいる。

全十一巻、別冊二巻という小林多喜二全集の決定版が世
に出るはこびとなったことは、祝福にたえないのだけれど、
私にはいまになってこの立派な全集をみることでできない
杉本良吉、池田寿夫、村山壽子らの幻がなつかしくてたま
らない。

『ナウカ版全集』発行の経過は、上記の貴司の文章でほぼ語
られていると思う。さらに具体的に、この全集の個々の作品
が、何を底本としどのように編纂検討されたものなのかについ
ては、この全集には解題も解説もついておらず、別個に書誌的
な調査が必要である。

この全集編纂過程で集められた資料は、戦時中、どのように
秘匿され、どこにいったのか、戦後の編纂事業とどうつながっ
たのか、というのも興味のある点である。

戦後最初の全集編纂事業である『新日本文学会版全集』編纂
の前半期に貴司は深く関わっており、その編纂委員会の様子を
折々に日記に書き留めているが、戦前のナウカ版とのつながり
については不思議なほど言及がない。むしろ、例えば関西学院
の川並秀雄の下で「オルグ」の完全ノートを発見したことを大

きな成果として書いているなど、戦前自ら編纂した全集の不完
全さを自覚していたようにも見える。また、勝本清一郎や手塚
英孝の持っている資料を編纂委員会に引き渡させるようにいろ
いろ手を尽くしている情景がチラリと描かれている。

これらの資料は、貴司が編纂委員会を去る時に「あとは黨員
諸君で好きなようにやりたまえ^①」と言い残しており、その時
実質的に委員会に残った蔵原、宮本、壺井（繁治）、手塚らが
継承し、共産党所蔵になったと考えられる。その一端は『小林
多喜二 草稿ノート・直筆原稿（DVD版）』に見ることがで
きる。

さらに、先述した島村輝「小林多喜二研究と貴司山治の役割」
では、『ナウカ社版全集』の基盤となった資料の一部が、日本
近代文学館の「川並秀雄文庫」に含まれているのではないかと
指摘されている。

以上のように、今後の研究に期すべきものが少なくないと思
われる。

八 “党の委託” はあったのか

結局、戦前の小林多喜二全集編纂に、一貫して関わったのは
貴司山治であることが、ほぼ確かめられるが、その経緯は錯雑
している。貴司はこれを「党の遺託」に基づいて行った仕事、
と述べるが、その意味と経過を整理しておこう。

まず、最初の全集である『作家同盟版全集』にどう関わったかは、具体的なことは判らない。丁度この時期、一九三三年後半、小林多喜二の『右翼日和見主義との闘争』の矛先を受けて貴司は作家同盟中央委員から追放されていた。ただ当時作家同盟に立て籠もって中央に対して造反中だった鹿地亘とは、つかず離れずの間柄だったことが日記から推察できるし、小林の死後、「党生活者」の中央公論掲載について立野信之とともに中公編集部との相談にあずかり、ゲラの分散秘匿、『作家同盟版全集』への採録を前提とした製版・紙型取りを行い、その紙型をいずれかに秘匿した、といった相当に立ち入ったことをしているの、それなりの深い関与があつたと考えなければなるまい。

この後全集事業が文化聯盟・共産党中央に移行していく中で、貴司は、宮本顕治と密会し「共産党版の多喜二全集発行に、合法面のプロデューサーとして働いてくれ」という依頼を受ける。貴司は「非合法組織発行というのは到底無理だし、たとえ本を作つても広く頒布できない」とその非現実性を指摘し、一般読者を前提とした「刊行会」で発刊するという一種のカモフラージュ作戦を提案し、宮本の了承を得る。しかし、働き手となるべき「文化聯盟」は崩壊し、一九三四年早々には貴司自身も拘禁されるにいたつて、この計画は瓦解する。

貴司は一九三四年三月治安維持法違反での起訴を前提に保釈され、六月に懲役二年執行猶予四年の判決を受ける。貴司はこの事態を前記のように「私は幸い又自由をとりもどした」と受

け止め「一存でやはりこの『党委託』の仕事をつづけることにきめ……」る。時代は既に日中戦争開戦前夜という緊迫した状態になつている。かつての活動家は獄中にあるか、あるいは『小林多喜二全集』編纂などということには「旧ナルプの文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心」を糺つた。「おかげで私はこの仕事をひとり占めにする事ができて、ずいぶん楽しかった。」と貴司は皮肉をこめて「うそぶく」のである。

そしてこの『ナウカ社版全集』の仕事は「委託」ではなくて「党遺託」と位置づける。つまり、委託者の宮本顕治は下獄して不在、共産党も壊滅して、委託者がいなくなつてしまつたから「遺託」ということになる。

中野重治は、この一連の貴司の言説に、若干の疑問を呈している。それは「全集の歴史」のなかの「この仕事は『党遺託』の仕事であるのを知っていた中野重治、宮本喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた」という一節である。中野は、貴司のやつているナウカ版発刊の仕事が「党遺託」とは意識していなかったという。そこで中野は、戦後、宮本顕治に「小林多喜二全集の仕事は党中央委員会で行うことに決めた」という事実があつたのかを確認したが、そのようなことはなかった、という答えだったというのである¹⁶。

戦後になつてからの、このあたりの微妙なやり取りを少し考えてみると――

確かに、「共産党中央委員会」といった組織が正式に議決したかどうかは知るよしもないが、少なくとも、プロレタリア文化聯盟という作家同盟の上部機関の組織的決定はあったと考えなければならぬ。前記のように機関誌『プロレタリア文化』には全集発行の長大な檄文が掲載されており、これは檄文であると同時に、傘下の同盟組織に対する指令文書である。機関決定なしにこのような文書が、機関誌上に、勝手に載るわけがない。

そして、この文化聯盟というものの実態は何であつたかといえば、作家同盟はじめ多くのプロレタリア文化団体を統合する連合本部であり、実質は共産党の文化政策を傘下の「大衆団体」とする各同盟に下達するパイプであつた。従つて、共産党中央（といつても実質的に文化政策の面では宮本顕治その人であろうけれど）の了解なしに、ことに、「刊行会」組織という「貴司好み」の大衆的手法を含む事業計画を檄するはずはないと考えられる。おそらくこれは、「受託者」たる貴司の意見を宮本が取り入れた結果の指令ではないかと思う。

つまり、一九三三年の文化聯盟の全集編纂事業について、貴司に合法面の役割を「委託」したということは、事実だつたと考えざるべきであろう。ただ「党の委託」はそこまでであつて、宮本もいなくなり共産党もなくなった一九三四〜五年の段階で貴司が全集編纂事業に踏み切つたのは、自らのべているように「一存」であり、誰かの委託によるものではない。

中野重治は「委託」と「遺託」を区別せずに語っているが、二つは異なつたことなのである。そして、宮本が「委託」に関して共産党中央の関わりに言葉を濁すのはおそらく、「文化聯盟版」として行おうとしたその事業が失敗に終わったための、政治家としての「おとぼけ」ではないのだろうか。

九 “情報現象”としての文学

戦前、厳しい禁圧下にあつた小林多喜二の作品が、どのように遇されていったかということを「全集刊行」というかたちを追うことで検討した。そこに見出されるのは、禁圧下にもかかわらず、人々がこの、二九歳で虐殺されたナイーブな魂と身体をもつた青年の言説を、何とかして維持し、秘匿し、折あればメディアに乗せて世に送り出そうとした、その執念の軌跡だつた。

つまりは、多くの人々の「想い」が小林多喜二のテキストの維持と伝播を支え続けたのだ。

私は本稿で、戦前の小林全集の「書誌」を描こうと思つたわけではない。

そうではなく、私は「文学」という「情報現象」の総体を考えたいと思う。——ある作者によつて物語られたテキストが、身近な人々に受け止められ、やがてメディアに放たれ、読み手に到達し、読み手の生活観に一定の変容を誘起し、それがまた

読み手の生活の輪を通して更なる世界に広がっていく……バルト (Roland Barthes) は「読者の誕生は『作者』の死によってあがなわれる」と述べたが、ここでは、比喩ではないそのとおりのことが、生起し波動して広がっていくのを見ることができるのである。

注

- (1) 貴司山治『小林多喜二全集』の歴史』『新日本文学会版小林多喜二全集第三巻月報』日本評論社、一九四八年。以下『全集の歴史』と略称。
- (2) 島村輝「小林多喜二研究と貴司山治の役割——当館所蔵資料を中心に」『日本近代文学館年誌 資料探索』第八号、二〇一三年二月。
- (3) 伊藤純「小林多喜二全集の編纂過程——『貴司山治日記』にみるその表裏」『立命館言語文化研究』一三巻三号、二〇一二年二月。左記で閲読可能。
〈http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_23-3/RitsILCS_23_3pp_67-84IT0.pdf〉
- (4) 貴司山治日記・戦後関連部分は翻刻されていないので、以下を参照。『貴司山治全日記 (DVD版) 一九一九年〜一九七一年』(立命館大学貴司山治研究会編、不二出版、二〇一一年一月)。
- (5) 内務省警保局『禁止単行本目録』復刻版(湖北社、一九七六年七月)。
- (6) 貴司山治「子」(初出『改造』一九三三年八月号)。但し伏せ字や

改稿が多いので、保存されていた自筆原稿によって原型を復元したものを以下で閲読可能。

貴司山治 web 資料館

〈<http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/ko/ko.pdf>〉

また私家版貴司山治小説集『丹波アリラ』(二〇〇六年十一月)にも収載。

- (7) 『小林多喜二 草稿ノート・直筆原稿 (DVD版)』(雄松堂、二〇一一年二月)。

- (8) 貴司山治・尾崎秀樹「私とプロレタリア文学」『文学』一九六五年三月号、岩波書店。

- (9) このことは「貴司山治日記」一九三四年七月三日の項にも、一九三三年五月の作家同盟第五回大会直後の話として以下のよう記載されている。「その時は私はすでもぐった小林を始めとするその下の同盟の幹部たちから陰に陽に排撃されて、中央委員に大会で一旦選出されたのを、ややこしい陰謀風のやり方で更めて罷免されかけていた」。その「陰謀風」の手続きを示す作家同盟中常委の「文書による中央委員会」なるチラシが、小樽文学館池田寿夫文庫に保存されている(図5参照)。

- (10) 戦旗社事件と鹿地亘——元来ナツプの芸術運動機関誌として創刊され、発行部数二万部以上とそれなりに発展してきた雑誌『戦旗』を、政治の優位性という議論から、一九三〇年、ナツプから分離し実質的に党中央アジプロ部の雑誌とすることになった。これに対し作家同盟の一部から猛烈な反対がおこり、鹿地亘らが上部団体のプロレタリア文化聯盟や党中央に造反し、作家同盟第三回大会が流会するという事態に発展した。これが世上「戦旗社事

件」として報じられた。したがって、今回の作家同盟のもめごと
は、彼の二度目の造反ということになる。鹿地に関しては、戦前
の戦旗社、作家同盟に腰を据えての活動の評価がもう少し検討さ
れてもいいと思う。貴司は日記で非常に多くの悪罵を鹿地に放っ
ているが、根底では共感をもっていたようで、作家同盟の解散、『文
学案内』の編集など重要な局面で協働している。『文学案内』の
中国関係の情報の窓口として、当時上海にいた鹿地は大きな役割
をはたした。貴司は鹿地を上海の内山書店内山完造に紹介し、鹿

地はその内山の周旋で魯迅と昵懇になり、一時は自宅に寄寓する
までの関係になったという。そして『文学案内』には、魯迅の著
名な一文「忘却の記念の為に」と、誌面を飾る近影をもたらし
ている（翻訳も鹿地がしている）。

(11) 「大衆の手にする『小林多喜二全集刊行』を提唱す——『小林多
喜二全集刊行会』の意義と任務」(『プロレタリア文化』三巻六号、
一九三三年八月)。

(12) 貴司山治「日記 一九三四年(昭和九年)(一)『国文学』八二号、
関西大学国文学会、二〇〇〇年二月、
二二八頁。また左記にも収載。
浦西和彦「翻刻 貴司山治日記——
一九三四年〜一九三八年」『貴司山
治研究』不二出版、二〇一一年一月、
一九〇頁。

文書による中央委員会

——常任中央委員の一員が委員に就いて——

わが作家同盟初五回大会は、中央による不當なる解散にも拘らず、直ちに
代議員会計を南渡し、報告、討案の全部を承認可決し、中央委員会を選出し
更に常任中央委員会を選定するの手續を一応完了した。然るに、常任中央
委員会力選出に關して、正規の中央委員会を府催し得なかつた手続より下
部から、東京支部より、同支部選出の中央委員を通じて、同志貴司山治を常
任中央委員の一員とすることに反對の意見が提出された。結果を招致した。
理由とするところは、同志貴司山治が今までに多くの重大な誤謬を犯した
といふところにある。そして東京支部は彼の代りに、同志荏不二夫を推薦して
來てゐる。

常任中央委員会はこれが決定した中央委員会に於てなすべき必要を認め、こ
ゝに右の問題に關して、文書に依る中央委員会を府催する。
但し、常任中央委員会は、同志貴司、荏不他にもう一人同志武田麟太郎を
常任中央委員候補者に推薦する。

依つて各中央委員は、同志貴司、荏、武田の内、何人を常任中央委員とし
て選出するかについて、来る六月 日迄に、文書を以つて、常任中央委員
書記局宛に送達されたい。

五月廿日

日本プロレタリア作家同盟
常任中央委員会

図5 「一九三二年五月「文書による中央委員会」チラシ(小樽文学館所蔵・池田文庫)
一旦選出された貴司に東京支部から異議が出されたので、貴司、
荏不二夫、武田麟太郎の三人で再選挙するから郵便で連絡せよ、と
いう趣旨

(14) 佐野順一郎「貴司宅に長年寄寓して
いたこともある高知出身の作家志望
者。『文学案内』にいくつか作品が載っ
ている。

(15) 「貴司日記」一九六五年八月二二日の

項 〔貴司山治全日記（DVD版）一九一九年～一九七一年〕前掲。
（16）中野重治「書かれるべき小林伝について」〔『年刊多喜二百合子研究』第一集、河出書房、一九五四年四月〕。